

# 高砂義勇兵 慰霊碑、来月に着工 社団法人設立し再建立

平成17(2005)年8月20日[土] 産経新聞朝刊

<http://www.sankei.co.jp/news/050820/sha032.htm>

---

【台北 = 河崎真澄】太平洋戦争に日本兵として出征した台湾先住民出身「高砂義勇兵」の戦没者を祭るため、台北郊外に建立する英霊慰霊碑の再建策が 19 日までにまとまった。撤去を求められた慰霊碑の移転と再建立のため産経新聞の読者などから 3,200 万円を超える義援金が集まったが、その受け皿組織として関係者は社団法人を来月 5 日に設立することを決めた。11 月に戦後 60 年を記念し除幕式と慰霊祭を行うことにしている。

この慰霊碑は 13 年前、高砂義勇兵の遺族が台北郊外の烏来郷に自力で建立したが、慰霊碑の敷地として約 1,000 平方メートルの土地を無償で提供してきた地元観光会社が、2 年前の新型肺炎(SARS)流行による観光不況のあおりで倒産。新たな地権者が慰霊碑の撤去を要求してきたため、遺族らで作る建立委員会が対応策を探してきた。

その窮状を報じた昨年 7 月 4 日付の産経新聞朝刊を見た読者らが慰霊碑を守る会(発起人代表・吉川福太郎氏)を結成。産経新聞も協力して昨年 11 月段階で 3,398 件の寄付申し出があり、総額は 32,012,391 円に上った。

こうした日本側の支援の動きに呼応して建立委員会の代表で烏来郷元郷長(町長)の簡福源氏らが、社団法人の「台北県烏来郷高砂義勇隊記念協会」の設立準備を進める一方、台北県から県有地の提供を受けることで交渉がまとまった。

慰霊碑を守る会と産経新聞では、総統府前国策顧問で台湾独立建国連盟主席の黄昭堂氏が理事長を務める「現代文化基金会」に台湾における義援金の管理を委託。基金会が会計監査する形で社団法人の「記念協会」に支援を行うことを決め、黄理事長と簡代表は、慰霊碑再建についての支援計画で覚書を交わした。

前総統の李登輝氏が揮毫(きごう)した「靈安故郷(靈魂は故郷に眠る)」と碑文が記された高さ約3メートルの慰霊碑は、台北県烏来風景特定区「瀑布公園」の県有地約1,000平方メートルで来月から建設が始まる。作業が順調に進めば、除幕式と慰霊祭は13年前に慰霊碑を建立した周麗梅氏(故人)の命日にあたる11月19日に行う予定だ。また、高砂義勇兵の記録や遺品を展示する記念館の併設も将来的に検討する。

記念協会の代表に就任する簡氏は、「高砂義勇兵慰霊碑にかくも多くの日本人が関心を寄せ、義援金を送ってくれたことに深く感謝している」とした上で、「さらに多くの日本人に、太平洋戦争で日本のために志願して戦い散っていった高砂族がいた歴史を忘れないでほしい」と話している。

**高砂義勇兵** 日本統治下の台湾で「高砂挺身報国隊」「陸軍特別志願兵」「高砂義勇隊」などとして太平洋戦争に出征した「高砂(たかさご)族」と呼ばれたマレー・ポリネシア系の台湾先住民の総称。総数は6,000人とも8,000人ともいわれる。血書志願するなど忠誠心が強い上、山地生活の知恵から南洋のジャングル行軍では先頭に立って道を開き、迫撃戦でも力を発揮した。半数以上が戦死したとみられるが、生還しても戦後は日本国籍を失ったため、遺族を含め十分な補償や恩給を得られていない。

[2005/08/20 東京朝刊から]